

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720107

研究課題名(和文) 日本語諸方言の提題形式に関する研究

研究課題名(英文) A study on topicalization forms in Japanese dialects

研究代表者

小西 いずみ (KONISHI IZUMI)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：60315736

研究成果の概要(和文)：

1. 西日本諸方言における引用表現由来の提題形式の意味・用法に関して、臨地面接調査・方言談話コーパスの用例調査により記述した。
2. 共通語における引用表現由来の提題形式の用法に関して、書き言葉コーパスを用いて計量的に把握、記述した。
3. 種々の1次・2次資料より日本語諸方言の提題形式(「は」相当助詞、引用表現由来形式、仮定表現由来形式など)をリストアップした。
4. 日本語諸方言を対象とした提題形式の調査項目案を作成した。

研究成果の概要(英文)：

1. Description on the usage of topicalization forms in some west Japanese dialects by interview-based and corpus-based research.
2. Quantitative description on the usage of topicalization forms in standard Japanese by corpus-based research.
3. Listing of topicalization forms in Japanese dialects.
4. Suggestion of a questionnaire for research on topicalization forms in Japanese dialects.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,300,000	480,000	2,780,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言文法、提題表現、引用表現、とりたて表現、富山県方言、広島県方言、方言談話コーパス

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本語諸方言における提題形式のバリエーションと各形式の意味・用法を記述し、それらの発達・変化過程について考察

することを目的とする。現代日本語共通語における提題形式の代表的なものは助詞「は」であり、その意味・用法については多くの研究がある。また、周辺の提題形式として、

引用表現に由来する「って」「とは」「といえ
ば」等、仮定条件表現に由来する「なら」な
どについても、近年、記述的研究がなされて
いる。一方、地域方言を対象とした文法研究
において提題形式がとりあげられることは
ほとんどなかった。しかし、既存の調査資
料・方言談話資料によると、諸方言の提題表
現に関して、共通語よりもφ（ゼロ形式、無
助詞）による提題表現がさかんである、引用
表現や仮定条件表現に由来する提題形式で、
共通語にはない独自の発達をとげたものが
あること、などがうかがえる。研究代表者で
ある小西は、このような方言における特徴的
な提題形式について研究開始当時すでに、下
のような簡略な記述・問題提起をしていた。

・「方言文法—引用表現に由来する主題提示
の形式を題材に—」国文学解釈と教材の研究、
50巻5号、pp.100-107、2005年5月

・「主題」大西拓一郎（編）『方言文法調査ガ
イドブック2』（平成14年度～平成17年度
科学研究費補助金 基盤研究 B 課題番号
14310196 研究成果報告書）、pp.3-24、2006
年3月

・「富山方言の提題・対比の助詞「チャ」に
ついて」『方言における文法形式の成立と変
化の過程に関する研究』（同上 研究成果報
告書）、pp.59-68、2006年3月。

ただし、日本語諸方言における提題形式の
バリエーションの全体的把握や、各形式の意
味・用法についての詳細な記述には至ってい
なかった。

2. 研究の目的

上のような研究開始当時の研究状況をふ
まえて、本研究では大きく次の3点を目的と
した。

- 1) 日本語諸方言における提題形式のバリエーションを把握する。
- 2) 上の1)の諸形式のうち、意味・機能上特に興味深い現象を示す形式をいくつかとりあげ、その意味・用法を記述するとともに、そのような意味・用法を獲得するまでの発達・変化過程について考察する。
- 3) 以上の成果とこれまでの共通語を対象とした研究での蓄積を踏まえ、提題という意味・文法カテゴリのありかたやその発達のしかたについて、理論的に検討する。

3. 研究の方法

上記2で「研究の目的」として記した項目ごとに記す。

- 1) 提題形式のバリエーションの把握：
『方言文法全国地図』第1～6集などの
既存の調査データ、『全国方言資料』『方
言談話資料』『全国方言談話データペー

ス』などの方言談話コーパス、および、
各地方言に関する記述的研究から、提題
形式とそれに関する記述・用例を収集・
整理する。また、2)の調査を進めるなか
で得られた形式についてもこれに加える。

2) 提題形式の意味・用法の記述：

次の二つの方法による。

a) 共通語文の翻訳、および、方言文の
文法性判断を問う調査項目から成る
調査票を用いた臨地面接調査。

b) 1)で用いた方言談話コーパスの用例
収集調査

3) 理論的検討：

上記1)2)の成果にもとづき、分析・考
察を加える。

4. 研究成果

上記2で「研究の目的」として記した1)
～3)の項目ごとに記す。また、当初の目的に
直接には該当しない成果について4)として
記す。

1) 提題形式のバリエーションの把握：

上記3に記した諸資料にもとづき、日本語
諸方言の提題形式をリストアップした。これ
らはその形態と由来から大きく次のように
分類できる。

- a) 「は」相当助詞…ワ、アなど。全国各
地にあり。
- b) φ（無助詞）…全国各地にあり。
- c) 引用表現由来
c-1) 「と+は」由来…富山方言・九州
北部方言のチャなど。
- c-2) 「というのは」由来…全国各地に
あり。
- c-3) 「と言う」テ形由来…ユーテ・チ
ューテ、テテ、テッテなど。西日本
各地にあり。
- c-4) 「と言う」仮定条件形由来…ユー
タラ・チュータラ、イヤーなど。西
日本方言各地にあり。
- c-5) 「とか」「なんか」等例示的引用
形式由来…徳島方言のヤコー、高知
方言のラーなど。
- d) 仮定条件表現由来…北東北方言のダ
バ・ナバ・ダッキヤなど。
- e) その他…富山方言のノコタなど。

また提題形式の地理的分布を知るための
資料として、国立国語研究所『方言文法全国
地図』所収の第10図「あれは（学校だ）」、
第11図「ビールは（飲まない）」、第12図
「酒は（飲む）」の略図を作成した。また、
関連事象として引用助詞「と」の地理的分布
を知るための資料として、同じく『方言文法

全国地図』第32図「田中という人」、第233図「(行こう)と思っている」の略図を作成した。これらの成果は、論文・書籍のほかほか、研究代表者のウェブサイト上に公開する。

2) 提題形式の意味・用法の記述:

特に西日本方言における引用表現由来の提題形式のバリエーションとその意味・用法について、臨地面接調査の結果と方言談話コーパスの用例にもとづき、記述した。とりあげた形式の一部について、その用法上の特徴、例文とともに示す。

○富山市方言の「チャ」

「引用助詞ト+副助詞ワ」由来だと推測される。指示語を承けることができる、一時的な状態叙述や絶対存在文で用いることができるなどの点で、提題形式として共通語の「って」に匹敵する発達の度合いを示す。また、「名詞句+助詞」・副詞など文の成分を承けることができるという点は共通語の「って」にはない特徴である。

- ・ {オーエス/ソレ} チャ何ケ。= {オーエス/それ} って何?
- ・ 太郎チャ今アコデ働イトンガダト。= 太郎 って今、あそこで働いているんだって。
- ・ コノ辺ニ郵便局チャアツケ。= この辺に郵便局ってある?
- ・ アノ人ノ顔、ハッキリトチャ思イ出セン。
= あの人の顔、はっきりとは思い出せない。

○広島県三次市方言の「イヤー」

「と言う」仮定条件バ形由来だと推測される(引用助詞は ϕ 化)。指示語を承けることができる点など、共通語の「という」と「といえば」「といったら」より提題用法が広い。ただし事物の絶対存在文では用いにくい。

- ・ {オーディーエー/ソレ} イヤー何ネアー。
= {ODA/それ} って何?
- ・ コノ辺ニ { \times 郵便局/?田中物産} イヤーアルカエノー。= この辺に {郵便局/田中物産} ってある?

その他、引用表現由来の提題形式については、北陸や近畿以西での「(ト)ユータラ」、島根方言の「テテ」等について、臨地調査・方言談話の用例調査を行い、その成果は、論文・書籍として公開した。

ただし、当初予定していた仮定表現由来の諸形式(北東北方言のダバ・ナバ等)については、方言談話コーパスの用例調査を行ったものの、まだその成果を整理し、公開することができていない。

3) 理論的検討:

〈提題〉という意味・文法カテゴリとしてのありかたや、その発達についての一般的な

考察・検討は、2)および下の4)の成果のなかで触れた。例えば、引用表現から提題形式への発達の間合いをはかるためには、「指示表現を承けることができるか」「事物の一時的状態やいわゆるウナギ文で用いることができるか」「絶対存在文での使用することができるか」といった点が指標となることを示した。また、同じ引用表現由来であっても、「とは」由来、「と言う」テ形由来、「と言う条件形由来」など他の構成要素の意味・文法特性により、「対比性を持つか」「文の成分を承げうるか」「認識内容に対する意外感を表明する文で用いることができるか」などの性質の違いが生じることを指摘した。

ただし、〈提題〉という意味・文法カテゴリとしてのありかたや、その発達についての総合的・包括的な考察と、その成果の公開には至っていない。

4) その他:

4-1) 共通語の複合辞「という」と「といえば」「といったら」の計量的把握

上記2)の調査・研究を進めるなかで、共通語の「と言う」仮定条件形由来の複合辞「という」と「といえば」「といったら」の想起用法(うち一部が提題用法に連続する)とその他の用法との関係やこの3形式の異同について、先行研究では十分に明らかになっていないことが分かった。

そこで、共通語の書き言葉コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』2009年モニター版を用いて、上記3形式の用例の計量的分析を行った。この結果、想起用法の「という」と「といえば」「といったら」に比べて、「XというとY {を思い出す/と思われる}」のような、心理変化・心理状態を述語とする例の頻度が高く、〈キーワードXに対し自ずとYが想起される〉という意味特徴を持つものに対し、「といえば」「といったら」は「X {といえば/といったら} Y (だ)」のような想起対象をそのまま述語で提示する例の頻度が高く、〈キーワードXの対応事物を話し手が提示する〉という意味特徴を持つことが分かった。この成果については口頭で発表した。

西日本における「イヤー」「(ト)ユータラ」などの提題用法は、「といえば」「といったら」のこの特徴をさらに拡張させたものと思われる。

4-2) 日本語諸方言の提題形式の調査票案作成

上記1)および2)の調査・研究を進めるなかで、日本語諸方言の提題形式のバリエーションと各形式の意味・用法を記述するための面接質問調査票案を、研究開始当時に公開していたものの改訂版として作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 小西いずみ, 西日本方言における引用標識ゼロ化の定量分析—生起頻度と言語内的要因の方言間異同一, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59号, 査読無, 2010, pp. 123-132.
2. 小西いずみ, 『方言文法全国地図』における回答語形数, 日本語学, 26 卷 11 号, 査読無, 2007, pp. 35-43.

[学会発表] (計 2 件)

1. 小西いずみ, 複合辞「という」と「といえは」「といたら」の用法の異同に関する計量的考察, 2011 年 3 月 14 日, 特定領域研究「日本語コーパス」平成 22 年度公開ワークショップ, 東京都
2. 小西いずみ, 引用表現における富山・大阪・広島方言の対照, 2007 年 11 月 25 日, 広島大学国語国文学会, 広島県

[図書] (計 5 件)

1. 小西いずみ, 私家版, 広大生の方言地図 2008-2009, 2010, 141 頁
2. 小西いずみ, 私家版, 広大生の方言地図 2007, 2010, 89 頁
3. 山口幸洋, 小西いずみ・ほか計 29 名, 桂書房, 山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛, pp.213-233.
4. 小西いずみ, 未公刊博士論文(東北大学大学院), 富山県方言の文法に関する研究, 2008, 198 頁
5. 小林隆・小西いずみ・三井はるみ・井上文子・岸江信介・大西拓一郎・半沢康, 岩波書店, シリーズ方言学 第 4 巻 方言学の技法, pp.1-38.

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/ikonishi/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小西 いずみ (KONISHI IZUMI)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60315736

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし